

日本の Baby Box の現状と課題

蓮田 健（医療法人聖粒会 慈恵病院）

熊本県内で相次ぎ発生した新生児遺棄事件をきっかけに、日本で唯一の Baby Box 「こうのとりのゆりかご」（以下「ゆりかご」）は、2007年に開設され、過去10年間で130人以上の子どもが預け入れられた。預け入れに至った理由としては、未婚の妊娠、貧困、不倫、家族の反対、パートナーの問題などがある。預け入れられた子どもは熊本市児童相談所が保護し、その後の処遇を決める。130人中、実親や親族による引き取り養育が23人、里親養育26人、特別養子縁組47人、乳児院など施設での養育が28人となっている。

「ゆりかご」に対しては、「安易な育児放棄を助長する」「『出自を知る権利』を損なう」「危険な孤立出産を助長する」などの批判がある。しかし、乳児の遺棄・殺人に対して、批判者たちが「ゆりかご」に代わるシステムを提案できていないのも現実である。

「ゆりかご」への預け入れは減少傾向にあり、2016年度は5件だった。これは「ゆりかご」の社会に対する認知度の低下や、熊本が日本の南西部に位置していて、多くの都道府県にとって熊本が遠方にあることなどに起因すると考えられる。

その他の問題点としては以下を挙げることができる。①赤ちゃんの愛着形成のために早い時期に里親委託を行いたいが、現状では、ほとんどの赤ちゃんが乳児院で育てられる。②預け入れられた赤ちゃんの養育状況等について公開される情報が少ないことが、Baby Box の是非についての検証を難しくしている。③年間約1500万円の運営費用負担。

日本では年間に約18万件の人工妊娠中絶が行われ、公表された子どもの遺棄事件が年間27～66件発生している。密かに殺されたり、遺棄されているケースを含めると、その総数は年間100～300人に至ると推測する。「ゆりかご」には未だ政府が関与せず、社会の関心も低下しつつあるが、乳児の遺棄・殺人を一つでも減らすために、「ゆりかご」が活用されるよう努力を続けたい。